ぷらたなす

NO.9
師走
（しわす）
長井高等学校
図書委員会
図書館
2025.12.23

冬だ！こたつだ！読書だ！

みなさん、こんにちは。雪が降って肌寒くなりましたね。雪合戦や雪だるまをつくったりして、「冬」を楽しんでいる人もいるのではないでしょうか。「冬」というと、どうしても屋内で過ごしてしまう人が多いと思います。特にこたつの中で食べるみかんは最高ですよね。でも、それ以外のことでこたつを満喫してみませんか。ここで、登場するのが「読書」です。「読書の秋」とよく聞きますが、実際冬の方が読書にうってつけなのでは、と私は思います。読書は面倒、と思う人がいるかもしれませんが、好きな食べ物や飲み物と一緒に、とりあえず読み始めてみると、案外どんな事より夢中になるかも。

（1-4　図書委員）

図書委員のおすすめの本

『アルキメデス大戦』

佐野　晶：著
講談社

この本の舞台は 1933 年の日本。この時、海軍は新たな戦艦建造計画をめぐって対立していました。建造反対派は不正を突き止めようとある数学者に助けを求めました。それが、主人公である櫂直です。この天才といえる数学者の生き様と史実やフィクションを交えながら、「誰があの戦艦大和を生み出したのか。」「激動の時代をどう歩んでいったのか。」が描かれた作品です。マンガが原作で、菅田将暉主演で映画化もされた名作の小説版となっています。歴史や数学に興味がある人はもちろん、興味がない人にもこれを機に読んでもらいたい一作です。

読みやすいので、みなさんも読んでみてください。　（1-4　図書委員）

図書館長より

押忍！　図書館長です。今回紹介するのは、泉鏡花（いずみ・きょうか）の『義血侠血』だ。なぜ鏡花なのかと言えば、『文豪ストレイドッグス』（ＫＡＤＯＫＡＷＡ）の鏡花が可愛いからではもちろんない（実際の鏡花が可憐な筆名に反して男性なので、実は美少年に違いないと確信していたのだが）。３年次生の進路希望先に私の学生時代の先輩が教授を務める大学があり、「そう言えば、先輩は鏡花がご専門だったな」と思い出し、本稿のネタ漁りも兼ねて、書店で文庫本を手に取ったのだった（もちろん、『文スト』コラボカバーの！）。

さて、本作だが、師匠である尾崎紅葉（おざき・こうよう）の手が入ってもいると聞くが、まあいかにも彼の弟子らしいと言うか、何と言うか。偶然と視野狭窄と「義理＞人情」が引き起こす悲劇は前時代的で、結構（＝作者が考えた、物語全体の構造）が過ぎる。「洋装せる元禄文学」とは、紅葉を批判した国木田独歩（くにきだ・どっぽ）の言だそうだが、これは弟子にもそっくり当てはまる。

一方で、『山月記』の中島敦（なかじま・あつし）は、鏡花を激賞した。曰く、「日本人に生れながら、あるいは日本語を解しながら、鏡花の作品を読まないのは、折角の日本人たる特権を抛棄しているようなものだ」、「鏡花氏こそは、まことに言葉の魔術師。感情装飾の幻術者」、「読者は、それが、つくりもの――つくりものもつくりもの、大変なつくりものなのだが――であることを、はじめは知っていながら、つい、うかうかと引ずりこまれて、いつの間にか、作者の夢と現実との境が分らなくなって了う」（『鏡花氏の文章』）と。熱過ぎて、さすがの私もちょっと引く。

鏡花はエピソードも面白い。潔癖症が有名だが、師匠への崇敬も度を越していた。紅葉の死因について、同門の徳田秋声（とくだ・しゅうせい）が軽口を叩いたところ、いきなり跳び掛かり、泣くほどぶん殴ったとか。私も怒られる前に筆を擱こう。桑原くわばら。